

活動報告

◆診療部

診療部長 田辺大朗

前年度職部医師、年度途中で宮川医師が退職し、医師は2名減の常勤医11名体制となった。しかし呼吸器科、肝臓内科、泌尿器科、代謝内科の非常勤医師による外来診療を維持し、診療に空白が生じないよう体制を整えた。循環器内科・呼吸器科・消化器内科・外科・泌尿器科・脳神経外科・整形外科・心臓血管外科・内科外来の他に乳腺外来・大腸肛門外来・糖尿病外来・肝臓外来・腎不全外来の特殊外来を設けている。2015年度の外来患者数は、新患者数3,924名、再診患者数40,986名で年間の総受診者数は44,910名だった。365日・24時間体制で救急外来を提供し、年間の救急総受診者数は4,459名で、うち救急車搬入は827名といずれも前年度より減少した。緊急性の高い重症患者のヘリによる搬送は3名で、内訳は外傷1名、心疾患2名だった。

総入院患者数は41,658名で、科別入院患者数は内科2,576名、外科8,845名、整形外科8,214名、循環器内科8,617名、消化器内科8,585名、腎泌尿器科4,821名だった。疾病分類では、損傷、中毒およびその他の外因の影響が最も多く264名で、次いで循環器系疾患が249名、消化器系の疾患が229名、新生物208名、呼吸気系123名の順で、前年と比較して損傷、中毒およびその他の外因の影響と消化器系の疾患が逆転して損傷、中毒およびその他の外因の影響が第1位となった。

外来化学療法室の利用者数は外科・消化器内科・呼吸器科・泌尿器科で延べ312名が利用した。臓器別では、食道1件、胃3件、大腸14件、肝臓3件、膵臓1件、肺臓3件、乳腺5件、前立腺2件だった。近年の抗がん剤治療の進歩は、手術後の治療成績の向上、治癒不能でも延命期間の延長などに大きく貢献している。また、化学療法による副作用は治療の成果に大きく影響する問題であり、当院でも薬剤部にて新規抗がん剤や臨床試験の情報収集に努め、安全に治療を導入するように努めている。

在宅医療の充実に引き続き取り組んでおり、リハビリ後の在宅復帰率は一般病床44.8%、地域包括病床78.1%、回復期病床88.5%であった。自宅への復帰率は、それぞれ37.9%、69.2%、80.0%であった。

居宅介護支援事業所では前年度338件のケアプランをたてている。訪問リハビリ数は3,597件で、前年の2,815件より大幅に増加した。今年度は通所リハビリを開設するため病院建物の改修を進めており、在宅で療養されている患者の要望に幅広く応えられるように充実させていきたい。

在宅での看取りは2件だった。癌患者で人生の最後を自宅で過ごしたいと希望される方が増えている。家族の負担や在

宅で過ごすことへの不安を取り除き、希望に応えられるよう周辺の訪問看護ステーションと連携し取り組んでいる。

済生会の基本方針としての生活困窮者への生活全般への支援をMSWが中心となり取り組んでいる。前年度は無料・低額診療事業は5.93%であったが、今年度は6.0%に増加した。今後も10.0%を目標に取り組んでいきたい。

研修医を迎えるようになり5年目となったが、済生会熊本病院に加え、済生会横浜市南部病院と徳島大学から研修に来院した。1ヵ月の研修期間であるが、人口減少、地域高齢化などこの地域の抱える様々な問題や一次救急から在宅医療まで幅広く経験している。特に当院の特色である急性期の治療を終えた患者の在宅復帰へ向けての過程は、熊本病院では経験する機会がなく、研修医にとっても重要な経験であり、将来の地域医療を担っていく出発点になってほしい。

